

「だれがいちばん偉いか」

(マルコによる福音書 9:30-37)

今日の福音で、主イエスは弟子たちに二度目の受難予告をしました。しかし、それを聞いた弟子たちは理解できないばかりか、怖くて尋ねることもできませんでした。そしてすぐに心離れた彼らは、誰が一番偉いかと論じはじめたのです。弟子たちに囲まれながらも、主イエスの十字架へ歩みは孤独でありました。

しかし、このような弟子たちであっても、主イエスは決して見捨てることはありません。歩みを止め、そこに座り込み、弟子たちを呼び集め、教え、導かれます。主イエスの人間への深い愛情がここに表されています。主イエスは「一番先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕えるものになりなさい」と言われ、子供を真ん中に呼び、抱き上げます。自分が偉くなりたいと威勢を誇示すると、力弱い存在は見えなくなってしまいます。そしてそれでは、自ら弱き者となって十字架に向かう主イエスのことを見失ってしまうことになるのです。主イエスを見失ってしまうなら、そこに明らかにされている神のみ心を見失うことになってしまいます。子供を見失っていることは、神のみ心を見失っていることと同じなのです。

翻って、わたしたちの世界は、教会はどうでしょうか。小さく力弱い存在への目が失われているならば、わたしたちは主イエスの姿を見失っています。わたしたちはいつも十字架を見つめ続けなければなりません。十字架の前に立つとき、わたしたちの視線は自然と低みから見上げることとなります。十字架の前に立つとき、わたしたちは自らを低くされるのです。その低みに立つてこそ、わたしたちは弱くされた存在を見る目が与えられ、主イエスを通して示された神のみ心を知ることができます。

主イエスは、わたしたちが無理解であったとしても、歩みを止め、腰を下ろして語りかけてください。そして最後は自らの十字架上での姿によって、わたしたちが立つべき視座を教えてください。十字架上の主イエスを見つめ、その言葉に耳を傾け、「子供」への目を与えられて歩んでいくことができますように。